

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第957号 平成27年7月2日

続・限界への挑戦

前回に引き続き、「限界への挑戦」について考えてみたいと思います。

といいますのは、私達は、日々の暮らしや仕事を通して、物理的、あるいは精神的にこれ以上は無理と感じるような場面、つまり、「限界という壁」にしばしばぶち当たる事が少なくないからです。

「限界という壁」にぶち当たった時に、何とかその壁を乗り越えようとチャレンジすると、初めから「どうせ無理」と諦めて引き返してしまう人がいます。

初めから諦めてしまえば、「限界という厚い壁」と格闘するエネルギーも時間も不要であり、何より格闘した後の敗北感を味わうというリスクからは解放されますが、しかし同時に、頭を押さえられてそれ以上は成長出来ないという、別の大きなリスクを背負う事になります。

勿論、「限界という壁」を乗り越えるために努力したとしても、それが旨く行くとは限りません。失敗する可能性は大きいのですが、その失敗をどう受け止めるかで道は分かります。

「限界という壁」と格闘した結果旨く行かなかったとすれば、挑戦者としての力量不足や事前の準備不足が考えられますが、更にいえば、限界点が高すぎる、いってみれば「身の程知らず」という場合もあるでしょう。そうなると、壁に衝突して華々しく砕け散るという事にもなりかねません。

どのような事であれ、挑戦して失敗した場合には精神的な痛手は大きいのですが、しかし、「限界という壁」に挑戦すれば、少なくともその壁の強さが分かります。そして何より、失敗した事によって自分の弱点が見えて来るはずで、自分にはどのような力が不足していたか、どのような準備をすべきであったか、失敗して分かる事は非常に大きいのです。

ところで、「限界という壁」というと、それは外に在るように感じますが、良く考えてみれば、その最たるものは、自分自身の内に在る才能のような気がします。

芸術やスポーツの世界、職人の世界で一芸に秀でた人を見ると、明らかに才能の違いを感じますし、いくら努力をしても、彼等の域に近づく事すら難しいだろうと感じてしまいます。まさに、才能という「限界の壁」を意識せざるを得ません。それでは、そうした一芸に秀でた人を目指して努力する事は無駄な事なのでしょうか。

私はそうは思いません。勿論、努力したからといって、行き着ける先はたかが知れている、そういう場合もあるでしょう。しかし、努力の積み重ねは、自分自身を変える力となる事は確かだと思います。そういう意味では、努力する事自体が一つの才能といえるのではないのでしょうか。

ノーベル賞受賞者の江崎玲於奈氏は、「人生の生きがいとは何であろうか。それは、“自分の才能の限界に挑戦する事”ではないであろうか。この努力を通じて、際立った個性も育ち、自己実現も図られる。挑戦は優しい事ではないが、今まで気付かなかった才能も発揮される」と述べています（同氏著「限界への挑戦」から）。

自分が「限界という壁」にぶち当たった時に、如何に努力してもその壁を乗り越える事が出来ないという事はあるでしょう。しかし、挑戦者としてその壁を乗り越えようと努力し続けられない限り、「限界という壁」を乗り越えるチャンスは決して訪れないという事は明らかです。

そして、挑戦者で在り続ける事で、今までの自分とは違う自分に出会うチャンスもまた広がるに違いないと、私は確信しています。

（塾頭 吉田洋一）